

新説「学問のススメ」

～心塾の基本コンセプト～

1、なぜ『学問のススメ』なのか

今、子ども達を囲む環境はとても複雑になり、多様化しています。

大人社会では、不景気が続き、一寸先が闇という状況が続き、当分このままであろうと予測されています。

そんな時代に当塾では『学問』を子ども達に勧めようと考えています。

話を進める前に、今の子ども達が置かれている環境や、社会情勢を知っておく必要があります。

1 - 1 学歴社会の崩壊？

いろいろな新聞や雑誌等でも『学歴社会は完全に崩壊した』などと言われています。そもそも『学歴社会』とは何なんでしょうか？

『学歴社会』

...『一流大学 一流会社』= 幸せな人生

といった感じでしょうか。

ここでいう一流大学 = 偏差値の高い大学であり、一流会社 = 一部上場していたり、給料が高かったり、世界をまたにかけた企業と定義できると思います。

勉強は基本的に楽しいものではありません。ゲームをしたり、好きな音楽を聴いたり、友達とカラオケにいったりした方が楽しいに決まっています。そういうものを我慢しながら勉強していくと言うのは強い意志が要求されます。

つまらないと他の人が思うようなことを、コツコツとやっていく 成績が上がる 企業が評価するといった構図かと思います。

なぜ成績がいいと会社は評価するのでしょうか。今の大学入試を見ていると、特にセンター試験などが要求しているのは、

事務処理能力

記憶力

の2つであると思います。

の事務処理能力ですが、数学などは圧倒的な計算量ですし、英語にしても、国語にしてもその問題量たるや想像を絶します。

確かにセンター試験をこなせる能力があれば、ある程度の仕事はこなせるでしょう。(事務系の雑多な仕事であれば...ですが)

の記憶力が社会ではあまり要求されていないという気もしますが。

これ以外に、実社会に出て役に立つことを考えてみると、

自己分析能力

も上げられると思います。

成績を上げようとする最初には、どこを理解していないのかを分析することから始めますが、勉強をする際に自分を冷静に分析できるようになっておけば、きっと社会人となったときに役に立つと思います。次に、

期日管理能力

も勉強にも、社会人生活にも必要とされる能力ではないかと思います。試験という一定の期日に向けて限られた時間のなかで精一杯の努力をしていくと言う点では、社会人生活の基盤ともいえる能力ではないでしょうか。

高学歴の人 = この4つの能力がある人

と会社の採用担当の社員が判断しても、それは無理もないことでしょう。なかなか人間に優劣をつけることには抵抗を感じつつ、採用される人間と採用されない人間とを分けないといけないわけですから。

ところが、バブル経済がはじけた頃から様子が変わってきたと思います。この4つの能力では、足りなくなってきた時代ともいえます。

右肩上がり神話も、土地神話も崩れ去り、一流会社といえども倒産の憂き目に遭う時代になってしまいました。

前述の通り、勉強は中途半端にしていると、これが最高につまらない。そして、その勉強ができるようになるには、その無味乾燥に見えることにも耐えなければならない。=我慢をする必要があります。

我慢 = 成果への期待 (自己への投資)

と、とらえると、いろんなことが見えてきます。

従来の考えでは、その成果が、幸せな人生だった。ところが現在では、その幸せな人生を約束するはずの一流企業も安心できないとなると、『我慢するのやめた』という子どもが出てきてもおかしくありません。ある意味仕方ないことかも知れません。

1 - 2 どうやって生きていくべきか再考を

こうした世の中になってくると、幸せな人生の定義を少々変更する必要がでてくるわけです。

一流企業 = 幸せな人生
ではなく、
どうやって自分で生きていくか
= 何をして飯を食うか
が幸せか不幸せかを左右するのではないのでしょうか。

これまでの塾での私の生活を振り返ってみると、確かに一流大学と言われる学校に合格した子どもたちがいます。

その子どもたちのことを振り返ってみると、ほぼ全員明確な夢を持っていたことに気が付きました。

- ・ 京都大学に進学したI君 理学療法師
- ・ 佐大医学部に進学したT君 医者(当然)
- ・ 青山学院大学に進学したK君 考古学者
- ・ 名古屋大学に進学したT君 弁護士
- ・ 筑波大学に進学したG君 学校教師
- ・ 山口大学に進学したY君 ロボット工学

この子どもたちは、全員速答できるほどのレベルでこの職業に就きたいと考えていました。

だから、どんなに私にきついことを言われても、耐えられる。(この子どもたちは、全員私に泣かされ

てるような気が...)

幸せという概念が、画一的でなく人それぞれになった。

第3次産業に従事する人が増大し、高度経済成長を支えてきた製造業従事者が全体の1/4になった現在は、知識労働者(仕事に高度教育を必要とする人)が増大しています。すなはち、知識が価値を生み出していると言えます。

高い学歴ではなく、何か一つの分野でも専門的な知識と学力が必要とされています。

そして、私は、

生きる力



ととらえています。

1 - 3 だから『学問のススメ』なのです。

ですから生きていくために、もっと専門的なことを学んでいくべきだと考えました。

そこで『学問のススメ』なのです。勉強や学習ではないのです。

『自ら学んで問う』のです。人から教わったテクニックを真似しても、応用問題は解けないし、生きる力など身につけません。自ら考える習慣がないと生き抜いていけそうもありません。それを実践するのに学校のように集団の中での一斉授業では困難を極めます。

個人個人見ている方向が違うのに、一斉に同じ授業をしていては、高い効果が望みにくいと考えました。ですから当塾では、一斉授業を行っておりません。

個人個人に合った問題集をどんどん解いていく中で疑問に思ったことを私に聞いて、さらに解いていくというスタイルです。また、高校生くらいになると、知識を増やさなくてはならない部分が増えてきますので、各自に合った本を推奨して、本から学んでもらっています。

とはいえ、必要なことがあれば、必要な人間を集

めて授業が始まったりします。

特に最近『論理』なるものが、学校教育のなかではほとんど教えられておらず、文型科目の点数が伸び悩んでいる子が多かったので、『論理』については、英語を用いてたっぷり授業をさせていただきました。

神出鬼没、千差万別といった印象を生徒達は感じたかもしれません。

2、『学問のススム』方

2 - 1 『アイデンティティ』の獲得

では、具体的に子ども達に学問を勧めていく時にどういったことに注意すべきか考えていきたいと思えます。

高校の現代社会の教科書の中にも登場しますが、エリクソンという発達心理学者がいます。そのエリクソンが著書「幼児期と社会」(みすず書房)の中で、アイデンティティという表現を使っています。

これは難しく言うと、自己同一性という訳がつけられ、『自分が自分であると思える感覚』のことで、自我は多くの社会的発達の過程において多くの他者や集団や社会の価値・規範・役割期待を取得しますが、その結果それぞれの他者・集団・社会と共通する観点・一般化された他者の観点を獲得していきます。個人はそれぞれの状況に応じて一定の社会的役割を果たすことによって、自分の自我を確認します。たとえば、長男・長女としての自分、友人としての自分、会社の一員としての自分、日本人としての自分などの役割を果たしていくことで、自分の自我(理性)を確認、検証していくのです。

このようなそれぞれの「~としての自分」を獲得していくのですが、これら複数の「~としての自分」の同一性を統合し、秩序付け組織化する普遍的自我の連続性・斉一性・普遍性を自我同一性といえます。

これは、難しいですね。高校の現代社会の問題となりましたが、簡単にいうと...

他の人とかかわることによって、その中で、「他者から見た自分てこんなだろうな」という感覚を覚え

ます。それと自分が思っている自分像を重ね合わせた結果、それが同じだったら自我が確立したとしようという考え方です。

エリクソンは、そんな identity を思春期に獲得すべきと言っています。つまり、思春期前の子ども達には、他者の影響があまりなく、それこそ自分の世界のわけです。ところが思春期になると、他者が自分の中にどんどん入り込んでくる。他者が気になります。だから思春期になると鏡を見るんですね。他者によく見られたいとおもうわけです。

そんな思春期の子ども達が、最初に対峙する他人が...親です。

2 - 2 さあ！親の出番です！

子どもと最も距離が近い人...それが親です。塾に最初に面談にこられた保護者の皆さんの要望は、ほとんどが学力の向上です。

その子どもに塾中に話を聞いてみると、その話をするとみんな釈然としない様子。

子どもの欲望 VS 親の期待

という構図が浮き彫りになります。当然子ども達は遊びたいし、勉強などしたくない。反発は必至です。

ここで親(保護者)の皆さんに確認したいのは、その親としての期待の中に、親の都合(親が安心したいから勉強しろとってないか)や『したごころ』(=親にとって都合がいいから)がないかどうかです。話を伺っていると、客観的にそうとれる発言をするお母さんが結構いらっしゃいます。

絶対そんなことはないという保護者の方は、それで問題ないんですが、ここでうまく折り合いがつかないと子どもは Identity の獲得に失敗したことになり、精神的に不安定になってしまいます。

子どもに「勉強しなければならない」や「勉強なさい」と言うのであれば、その子どもに対して「なぜ勉強しなければならないか？」という疑問に答えを返してあげるだけの論理力を身に付けないといけません。

もしはっきり理由が説明できないのであれば、子

どもと一緒に勉強し探せばいいと思うのです。子どもと一緒に歩いていくスタンスがあれば大丈夫だと思います。

子ども達は、思春期に想像を絶するような葛藤をしています。それを尊重して、選択した道を肯定してあげてみてはどうでしょうか。

だからと言って子どもの言うことの丸呑みは問題があると思います。子どもの意見を一旦尊重してあげて、親としての希望をきちんと論理的に（感情的になることなく）伝えるべきだと思います。そんな議論ができれば最高だと思います。

そして『学力の境界線』（=ここまでは互いに納得できるという許容量の限界線を確認してみたいか）がでしょうか。

2 - 3 塾にできること

心塾のような塾でできることは、何があるでしょうか。これまで言ったようなことはなかなか学校では教えることができないことだと思います。一斉指導を行っていかなくてはならないという状況の中で、学校の先生達は、相当苦しんでおられると思います。

我が心塾では、そんな状況から、次のような提案をしていきます。

『～したい』が源泉

1 - 3 で申し上げたとおり、心塾では一斉授業を行いません。目標は1人1人ことなるものです。勉強については、その本人の納得がないと全く進みません。いろんな話をしていく中で、本人が納得する線はどこにあるか探っていきます。少しずつ、将来どんな自分になりたいかの話をしていきます。

その中で、Identity の獲得のお手伝いをさせていただきます。

自分が何になるか...とか、何をしたいのか...といったことは、なかなか簡単に答えが出るものではありません。

ですから、心塾の空間を『自分の将来のために

自分自身のことを考える時間と空間』と位置付けています。

そんな中で、はっきりとした目標を自分で立てることができると、子ども達はどんどん勉強するようになります。それこそ寝食を忘れて勉強します。

個別対応

このようにして決定したことは、それぞれ千差万別、十人十色です。一人一人の目標に応じた問題をどんどん解いていっていただきます。その中でわからないところがあれば、質問をどんどんしてもらいます。

問題の答え合わせは一切を私がすることで、生徒がわかっていない部分を探っていきます。その場合、わかっていない人がたくさんいる場合は、突然の授業が始まったりします。

社会にできることの醍醐味を感じてもらう

社会にできると一口に言っても、大学を22歳でストレートに卒業したとしても、定年までの約40年間もあるわけです。とにかく長い。

そんな長い社会人生活を乗り切っていくために必要な能力とは、

- (1) コミュニケーション能力
- (2) 友達を作る能力
- (3) アイデンティティを確立する能力
くりかえしになりますが、アイデンティティとは自分が自分であると思える感覚のことです。
- (4) 知識社会で行われる激しい競争に勝ち抜くためのより専門化した知識

であると考えます。それさえ体得していけばこの不況の波もなんとか乗り切れるのではないのでしょうか。そんなことも伝えていきます。

『小学生』

この時期には『勤勉性』を身に付けて欲しいと考えています。勤勉さの最もベーシックな感性や風習は小学校時代に身に付けておくべきです。『勤勉』とは一体どういうことでしょうか？

『勤勉』 = 『社会的に期待される活動を自発的に、
習慣的に営むこと』

と定義します。自発的であり、習慣的でなければなりません。ある日突然やって、翌日できないと言うのは勤勉とは言いません。一夜漬けの勉強みたいなものですが、平素からコンスタントに習慣的に社会的に期待される活動に取り組めるかどうかというところが勤勉さの定義と考えます。

その勤勉さを身に付けるために、『仲間と道具や知識や体験の世界を共有しあわなければならない』と考えます。

友達から学んだり、友達に自分の物を分かち与えることが大切ではないでしょうか。

この経験を十分しないと、人間は優越感と劣等感を体験しながら生きていくことになると思います。能力の高いクラスメートに出会ったときに、その友人を尊敬できるか、その友人に共感できるかということです。現代っ子はそういう気持ちにならない子が多いと感じています。で、嫉妬とか、羨望とか、敵意とか、その裏返しとしての劣等感を強く意識してしまっている。

逆に、自分の方が何かすぐれているときには、健全な誇りや自信ではなくて、優越感を感じてしまう。劣等感と優越感とは表裏一体で、劣等感のない人には優越感という感情はなく、優越感のない人には、劣等感ももちろんないわけです。

共感的で相互依存的な生き方をできるかがこの時期の課題と考えます。

ですから、小学生のいる時間は、問題を解くに当たって、友達同士教えあったりしている光景がよく見られます。そんな光景を大切に考えています。

『中学生』

この時期のテーマはアイデンティティの確立です。

自分という人間の個性や特質を問う時期です。

自分というのは、一体何なんだろうということを実感する、言い換えると、自分の本質を知り、他の人との違いを知ることでしょうか。

このアイデンティティの確立には、価値観を共有し合えるような友人が必要です。なぜかと言うと、思春期にアイデンティティを確立すると言うことは、自分を客観的に見つめることでもあります。

幼児期の子ども達に将来何になりたい？と聞くとそれこそ「会社の社長になりたい」「プロ野球選手になりたい」「Jリーガーになりたい」とかそれはもうたくさん出てくる。自由に言います。というか、真剣にその職業に就けると信じているようです。それが『主観の世界』です。アイデンティティを確立すると言うことは、客観的に自分を洞察する力が身につけてはじめて可能になるのです。

だから、思春期の子ども達は鏡をよく見るようになる。自分が客観的にどんな様子をしているんだろうかということが強い関心事になる。

けれども、最大の関心は実は内面にあるんだと思います。自分の内面の心が一体どうなっているんだろう、そんな人格を持っているんだろうかということを実感するために鏡の役割が、友人たちではないかと思うのです。自分が親しくしている友人の自分に対する感想とか、評価をたくさん寄せ集めて自己というものを作っていく。外見に関しては鏡で事足りるんですが、内面については友人が必要となってくると思います。自分に対して、安心できるようないい評価をしてくれる友人というのをもち必要がある。ですから、思春期の若者は、小学校時代と違って、価値観の共有できる友人が必要ということになります。

思春期のそういった発達段階というのは、それまで広くいろいろなタイプの友達とコミュニケーションをしておく体験によって、友人も選ぶこともできるし、自分が選ばれて仲間に入るということもできる。

そして、この時期にはとても重要な通過儀礼があります。それが、高校入試です。それまでは、義務教育という名のルールにどっぷりあぐらをかいていることもできる。ところが、そのルールが一旦切れる。そこのつなぎめが高校入試。

これが難しいんです。アイデンティティが確立しだしている子どもはいいんですが、全くアイデンティティの確立をみていない子どもにとっては、母親は『勉強しなさい』『いつまでテレビ見てるの』などの注意や迫り来る入試とで揺れ動きます。自分の目標も定まっていないうちから、寝ないで勉強できるとは思いません。

この時期は、自分が将来一体何になりたいのかを模索していく時期です。もちろんその夢と言うのは最初の段階では変化していてもいいんだよと声をかけています。だから難しく考えなくていいと伝えます。

当塾では、どんな夢が出てきても対応しやすいように英語、数学の勉強を中心に進めるように伝えています。英語と数学は、やろうとしたときに、すぐに結果がでにくい。積み上げが必要な科目なので、こっそり準備をすすめているといった感じです。

ところが、定期テストとなると子どものモチベーションが急激に上昇します。そのときは何の科目でもテスト対策しようと言っています。テスト期間中などは塾が活気に溢れます。わかる子が困っている仲間に教えていたり、数人で議論したり、すごいです！

高校入試を控えた中学3年生によくいうのが、『自分の夢を達成させるために決めた高校の偏差値が高かろうが低かろうが問題はない』という考え方です。

『佐賀西高校 名合格』という宣伝をみると悲しくなります。偏差値の低い高校に合格した子には何て声をかけているのか...心配です。

将来弁護士や医者になりたいのなら、西高が一番可能性が高くなります。でもそういった仕事だけではないのですから。

『中学生に期待すること』

～思春期の葛藤を肯定できる環境を提供したい～

基本的に学校の授業に平行して、子どもの学力の

確認、興味のある科目の発見を目的に学習していきます。科目ごとの内容理解を確認し、予習・復習等を学習レベル・学習量共に子どもの納得を前提に進めていき、子どもの勉強意欲を向上させることによって、学力の向上を目指します。

『定期テスト』が子どもたちの中でも「評価の目安」であり、課題になってきます。

そして、保護者の皆さんの大きな目的としては、「学力向上」が一番だと思います。

もちろん、心塾でも学力向上が大きな目的であることは間違いありませんが、他の進学塾とは異なる視点を持って学習指導していく事を前提としています。それは子どもの内面の葛藤を充分配慮した上で学習指導していくということです。

近年、思春期における残酷な事件がおきています。思春期の子どもの心は複雑かつ繊細で、衝動や感情が突発して発言、行動に移ってしまうことがよく見られます。ここで「学力」「学習」「点数」のみを取り出して「保護者が求める理想像」のみを突きつけると取りかえしのつかないことになりかねません。

私たち大人が中学生の頃の話を持ち出してもさほど意味をなさないような気がしています。社会情勢が全く違うこと、情報が氾濫していること、社会通念が全く違うこと...過去の話は意味はありますが、大人が思っているほど子どもの心を打っているようには見えないのです。

そこで私は、思春期における子どもの葛藤（家族の問題、友達関係、部活関係、自分の問題、異性の問題、学力の問題など）を肯定していきたいと考えています。子どもの内面でこれらの一つ一つの範疇において、理想と現実のギャップが子どもの葛藤を生み出しているのではという発想で接します。この時期に子どもの内面は、そのどれもが大切でその時その時で葛藤の重要度が変化してきます。その微妙な内面の変化にできるだけ対応していけるように子どもと接し、葛藤の一つ一つを肯定しながら学力の必要性、学習の意味を説明していきます。

内面的に難しい時期だから勉強しなくていいというのではなく、あくまでも子どもの納得を前提として学習内容を検討、共有していきます。

『高校生』

高校生くらいになってくると、必要なのが『親密性』だと思います。自分を賭けることができるほど、自分を賭けてしまっただけ悔いがないと思えるほどの対象を見つけることが必要になってきます。あるいは、『親密性と生産性』といってもいいでしょう。価値をこの世に作りつつあるのだという実感です。

当然この時期でもまだアイデンティティを懸命に確立しようとしている子どもたくさんいます。大学を選定しようとしたが、大学には求めるものがないと感じ、ドッグトレーナー養成専門学校に進学した子もいるし、それはもうなんでもありです。

東京大学に行くことが人生の最高の切符だなんて今の世の中誰も思わないでしょう。それは、国家公務員になって日本を動かすんだという強い使命感を持った子どもは、東京大学に行くのがよいでしょう。

西高に通う生徒の中で、当塾のOBだったY君は、偏差値的には高かったのですが、どうしても『ロボット工学』の教授のゼミに入りたいという事を突然言い出し（本人いわく前から決めていたそうですが）周囲は困惑しました。

それでどうしても偏差値的には10以上も低い山口大学に進学したいと言うのです。西高の先生初め、ご両親も戸惑っておられたようです。

私はそれを聞いて『そうか。入試に必要な科目は何と何？』と当たり前のように言ったところ、『先生は、オレが山口大でいいと？（いいの）』と驚いた様子。でも私は『Y君が行きたい大学が一番いい大学なんだよ』と答えました。そのときのY君の笑顔は忘れられません。

ちなみに彼は、今春山口大学の大学院の卒業を決め、島津製作所の内定をとりつけ、ロボットの開発の仕事ができると意気揚々と電話してくれました。

実際、高校生がやってくる時間は、2時間設定していますが、2時間自分の夢とか、将来の仕事とかの話をしていて終わってしまったということも...

いずれ、それが本人の将来像を決定付けし、そこから湧き出てくるモチベーションのみが、あの辛い受験勉強をも、楽しい充実したものに変わってくれるのです。

高校生の時間帯は、唯一授業を行っています。それが『論理学』です。残念ながら高校教育ではほとんど扱われることがない。たまに英語でそんな話をしてくれる先生がいるとか、そんなレベルのようです。

この話をセンター試験の英語の問題を使って説明すると、みんなとても驚きます。

論理を学ぶことによって、英語と国語は問題の解き方が劇的に変わる。

あとは、大学入試ともなると、必要な科目の組み合わせはそれはもう無限大。

各自必要な科目について自分で考え、困っている単元については、必要な本を紹介します。本で勉強をしてもらいます。

わからない部分については、私の質問をしてくるように指示しています。

『大学受験浪人生』

浪人生に関しては、かなり特殊な状況下に置かれるその性格上、個人個人で違いすぎます。そのことを理解していただくために、体験記を見ていただきたいと思います。（かなり激しい文章も見受けられますが、本人の激しい感情のせめぎあいを尊重して原文のまま紹介します）

（彼女は来春から、早稲田大学文化構想学部に進学します。周囲は、その事実だけを捉えて彼女を評価するようですが、実際の生の声を聞いてみるとその激しい葛藤が伝わってきます。

彼女は中学3年の一年間を心塾で過します。その後高校入学後は塾を辞めていました。その後3年の時を経て、浪人が決定したからまた心塾にお世話になりたいということで帰ってきたという経緯です）

Fさんの体験記

『私は、この春から早稲田大学文化構想学部へ進学することになった。この文化構想学部では、一つ分野にかかわらず、様々なものに手を出し、学ぶことができる。そんなところが一つのこと集中できない、はっきりとした将来の夢も描くことができない私に、ちょうどいいと思った。

こんな優柔不断な自分が恥ずかしい。また、焦りを感じているのも確かだ。だから私は自分自身に言い聞かせる。

「ダンサーの森山開次だって、ダンスに目覚めたのは21歳だった。有名ブランド、シャネルの創始者ココ・シャネルも子どもの頃からデザイナーになりたいと思っていたわけではない。私もまだ大丈夫だ。」

思い起こせば、私はいつも迷っている。迷って大体間違っただ道を選択する。失敗してはじめてその選択肢を消去できる。大きな痛みを伴って。

友人の中には、私の不器用な生き方を「私らしい」といってくれる人もいる。しかし、私は彼女の慰めに「私の何を知っているのだろう」と反感を抱く。

常に私は、流動的で確たるものがなく、ここで「ふっ」といなくなっても、誰も気にも留めない存在だと思う。中2の時から愛読書の一つに太宰治の「人間失格」がある。この本の主人公葉蔵もまた、私と同じく流動的で受動的、他人からどう見られているかを気にし、その他人から見る自分と、自分の思う自分との間に違和感を感じつづけ、駄目な人間である自分を見破られるのを恐れていた。私も、自分の“負”を見破られることを恐れ、社会の貼るレッテルにしがみつき、こだわり続けた。

私は、中学校・高校とずっと苦しかった。何が私で、何のために生きているのか、果たして私は世界に必要な人間なのか。

中学校の頃は、無駄に成績がよかったために、周囲の人は私に期待した。「優等生」というレッテルは、学校の先生から一目置かれ、厳しい指導はあまり受けたくないといういい点もあったが、失敗をすると周囲から見放されるという恐怖もあった。私は、自分の

“負”を他人に見破られることを恐れ、交友関係をおろそかにし、その結果、当然、私を恐怖から救ってくれる人もいなかった。私は強くならなければ...と思い、孤立し、傍若無人に振舞った。成績さえとっていれば、友人や教師と一定の距離感を保つことができるため、それなりに勉強はした。当時も心塾にお世話になったが、よく覚えていない。生活は不安ばかりだった。勉強している間は、安堵感が得られた。

高校は、私の空っぽな勉強が役に立ち、無事第一志望に合格できた。だがそこでは私より成績がよく夢のある人が努力するため、私はすぐに劣等生になった。私はいらぬ人間だと心底思った。ここで逃げるように部活にのめりこんだ。といっても部活でもうまくいかなかった。すぐに退部したのだった。きっかけは私の親しくしていたはずの友人たちが、私に何の相談もなく、辞めることになったというものだった。彼女らは部の上役であったために、彼女らを引き止める話し合いが行われることになった。私はそこで一生懸命彼女らを引き止めるつもりでいたが、そうしたかったのだが、うまく伝えられず、彼女らを罵倒し、傷つけるだけになってしまった。彼女らは当然部活を辞め、私はそのとき部活に残った。しかし、私は彼女ら以外の部員をあまり大切に扱っていなかったために、私が発言すれば場はしらけ、私の部を盛り上げようとする行動は、単なるKYとなり、何だか、よくわからないまま部を去ることになった。そのとき、私は無知であったために、他人に依存しすぎる自分を無視し、信じていいのは自分だけなんじゃないかと誤認した。この孤独をどう扱っていいのかわからず、前々から興味があった職業「音楽家」を目指すという口実のもと、学校をサボりはじめた。音楽は好きだったため集中できた。このまま続けられたらいいな...という安易な考えで音大を志望した。だが、音大進学は莫大な金を必要とする。結局あれはコネクションだから。親に対する申し訳なさも常にあった。私は国立の一次試験を追加した時点で、急に冷静になり、「このままじゃにげてばかりだ」と思い切り、二次試験では馬鹿みたいに手を抜いた。今までのことは何だったのかと思いつつ、現実を見なければと思いつつ失敗した。そして浪人生活が始まる。中学校の頃、ただ問題を

解くことに夢中になっていた自分を思い出し、あの頃はよかったなあなどと思い、新井先生に電話してみる。

4月1日から塾に通い始めた。部活を辞めてから約1年半も勉強からご無沙汰していた私は、全く集中できなかった。新井先生から渡された教材に1ヶ月も2ヶ月もかかっていた。まだ去年の夢のような好き放題の生活が忘れられず、楽器が吹きたいと思って勉強していた。ちんたらといったが(ちんたらといった方が)適切かもしれない。

今思い返してみると、それは弱さだった。甘えだった。逃げだった。

10月頃、私は新井先生に叱られた。

私の自分をどうでもいいと思っていることが、様々なところに現れ、他人に迷惑をかけていることに気づかされた。後悔した。

その時いつも横で誠実に、謙虚に、医師を目指してがむしゃらに勉強するCさん(一緒に浪人生活を送る生徒である)に憧れを抱いた。どうしてそんなに夢を追えるのか、そんなに打ち込めるのか...彼女はその答えを言葉にすることはなかったが、勉強に対する姿勢で示してくれた。夢もないけど、まっとうな人間になるチャンスだと思い、私は勉強しようと思った。遅いスタートだけどまだ間に合う。

それから私なりに勉強した。問題をこなすことだけが気持ちよく、新しい知識が身についてくるとうれしかった。同時にやればやるほど盲点が見え、難易度も上がった。そこで私は何度もつまづいた。精神がくじかれた。落ち込むたびに自分の弱さに気づき、過去の逃げてきた経歴が「また今回も一緒だよ」といつてきて、落ち込みが増す。

そんな逃げをどうしていいのかと思い、家族にあたり塾も休んだりした。弱さを実感しても、克服するために、自分を見つめなおそうとは思わなかった。

2月の受験を目の前にして、再度私は新井先生に叱られた。ここで私に欠けているものを自覚した。私は他者の目を気にする割に、他者の気持ちを考えることがなかった。このままだったら、私の悩みは私の中を永遠に回りつづけ、答えは得られないままだっ

た。他者とふれあい、他者を大切にし、他者から学ぶことで私は成長できるんだと気づけた。最初の試験まで時間がなかったが、できるだけことはやった。

そんなとき、新井先生が『スラムダンク』という漫画を教えてくれた。なんだかんだいいながらも、他者と共に成長し夢に向けて努力するカッコいい人の話だった。

その中で、弱い人間みっちゃんは、安西先生にこう言われる。

『最後まであきらめちゃいかん。

あきらめたらそこでゲーム終了だよ。』

私もこの言葉を胸に最後までやりぬく決意をした。

風呂に単語帳を持ち込み、しつこく覚えた。英語しか頼れるものがなかったから、すぐる思いで勉強した。やはり不安は拭い去れなかった。今までの自分が駄目だから、こんなこと今更しても無駄だと。

不安におしつぶされそうな時、憧れのCさんが手紙をくれた。

『Fちゃんは強くなったよ。

横で勉強している私が知ってる。』

そう言ってくれて嬉しかった。勇気がでた。自分じゃわからないけど、強くなったと言ってくれる人がいる。だから私は少し強くなれたのかもしれない。それにこんなにも私を見てくれて気遣ってくれる人がいる。私は孤独じゃなかった。一緒にいた時間を無駄にしたくないという思いが固まり、度胸になった。

彼女の手紙と、スラムダンクと受験票を鞆にいれて、試験を受けた。恥ずかしい過去とは決別しようと、新しい一歩を踏み出そうと粘った。

合格できた。

私は、今回の合格を人生をやり直すチャンスと捉えている。本当に大切にしたいと思える友人もでき

て、何でも話せる友人、私と共に私の歴史を刻んだ友人がいて、何も恐れることはないとおもった。一人よがりである必要もなく、強く、見栄を張る必要もない。不安になればそっと寄り添ってくれる人がいる。

自然体で飛び込める、初めての空間としての大学。もう逃げない。弱さも、甘えも一つ一つなくしていこう。もし、くじけても手を差し伸べてくれる人がいるから大丈夫。

安心だから、自分に何ができるのか、何をしたいのか、4年間の内にじっくり考えて決めようと思う。』

《塾長の感想》

思春期の子どもがいかに悩み、いかに葛藤しているかがわかる文章でした。

いかに彼女にとって、友人のCさんがたいせつであったかストレートに伝わってきます。

小学校の時から、きっと心の許せる友人があまりいなかたのではないのでしょうか。中学校で優越感、高校で劣等感を痛烈に感じ、苦悩している様子がよくわかります。

発達心理学の中で、『モラトリアム』という考え方があります。これは『猶予期間』と和訳されますが、大人としての義務や責任を猶予される時期をさします。Fさんはまさにモラトリアムの真っ只中にいると、いって過言ではないかと思えます。

自分で明確な目標が持たずにいて、なおかつ勉強に打ち込まないといけないという状況は、本人にとっても苦痛だったと思いますが、友人と励ましあいながらどうにか頑張ってきたという経験は、一生のものとなるでしょう。

このFさんの場合は、浪人生を自らえらんだという経緯から、自ら勉強をしなくてはと初めから決断していたことは、彼女にとっては実は明確な目標だったかもしれません。

しかし問題なのは、私の経験上、普通に高校にかよう子ども達のような気がします。

自分の望む高校に入り、子ども達の視野は今まで以上に社会に向かっていくと思います。同時に社会へ進む悩みと自分の抱える悩みが混同し、学校でのいじめ、部活、勉強、友人、異性関係、将来の夢、家族関係、自分自身の悩みが増大し、難しい時期が続くことは変わりありません。一昔前は、「大学進学」「部活動」と多くの高校生が向かうべき高校生像がある程度固まっていた、子ども達においても悩みが少なかつたように感じます。しかし、時代が進むにつれて、子どもの選択肢が増え、自分たちの生き方に迷い、悩み、多くの葛藤を抱え込んでいる子どもたちが増えてきたような気がしてなりません。

そんな子ども達の増えてしまった「悩み」「不安」の上から頭ごなしに『学業』をかぶせてしまったらどうなるでしょうか。

子ども達の内面で、その不安、悩みが膨張し、とても自分から勉強していくという気にならないのではないのでしょうか。その延長線上に、『社会に出て働く』という覚悟が得られない=ニートがあるのではないのでしょうか。

勉強をしようと一旦は決意したFさんでさえ、あれだけ苦しむのです。普通に高校に通う高校生が苦しんでもおかしくないように思います。

その辺を踏まえ、『子どもが現実社会を受け入れるまで焦らずじっくり待つ』『社会へ出る準備期間を応援する』というスタンスがいいのではないかと思うのです。

『不登校』との対峙

これまでご覧頂いたように、学校に行っている子ども達は葛藤しています。しかし、その葛藤が激しくなりすぎて、学校に通わなくなった子どもたちがいます。

世間では、「親が甘すぎ」「本人の甘え」等の原因を挙げる人もいます。

我が塾でもこれまで不登校の子ども達が来ていました。学校には行かないが塾には来れるという子ども達です。そんな子ども達と直接話しをしてみると、そんなに単純なものではありませんでした。

今では大学に通う、元不登校の Y 君とこんな話をしました。「不登校で3年遅れたとしても他の人が80年で死んで、自分は83年生きればあいこじゃないか」「人生80年を80分としたら、この3年間はたった3分じゃないか」と笑いあいました。

そうは言っても、学校に行かずにいる子ども達自身はなかなかきつそうでした。サボっている子は別として、普通は行きたいのに行けなくて苦しんでいるのですから。

それなのにあっさり「学校なんか行かなくていい」と言ってしまったら子どもはがっかりするのではないのでしょうか。子どもが学校に行かなくなっているのに、周囲がそのことを本気で考えてくれないんですから。

周囲は「学校に行かなくていい」なんて言わないでよく考える必要があると思います。なぜこの子は学校に行かないのか...行ったほうがいいのか、行かない方がいいのか...いろいろ考えないといけません。

決まりきった正解などありません。

場合によっては、「あの学校の制度が悪い。先生が悪い。だからそんなところは行かなくていい」というような判断もあり得ると思います。そのときの問題は親御さんも含めて、周囲がいろいろな事情を見聞きして、そう判断したかどうかです。周囲が真剣に悩んで、「それだったらしばらく様子を見よう」と思ってくれたなら、子どもは満足すると思うのです。周囲がそれだけの「補償」を子どものために使ってい

るので、頭で考えた理屈だけで「学校に行かなくていい」とか「が悪い」と言ってしまったら、子どもはがっかりしてしまうのではないのでしょうか。

実際に学校に行かなくなった場合、しばらく様子を見ていてそれでも行かないようなら、専門家に相談したほうがいいのかもありません。しかし、今は不登校と言っても、いろいろあるからととても難しいんだと思います。単にサボって学校に行かない場合もあるでしょうし、簡単には言えないと思うのです。これだけ不登校という言葉が流行るとどうしてもなりたがる子もいると思います。

それと思春期になると、「学校には行っているんだけど勉強をしません。どうしたらいいでしょう」という相談が本当に多くなります。それは小さいうちに勉強の楽しさを教わっていないからではないのでしょうか。勉強を義務づけて「嫌だけどしなければならぬ」というやり方をしてしまうことが多すぎるような気がします。本当の意味での好奇心が育っていないと思います。

かわいそうなのは、成績でしか評価されないから、評価されるためにだけに勉強している場合です。家も面白くない、学校も面白くない。何にも面白くない。だけど勉強ができるとほめてくれる。だから死に物狂いで勉強していい点をとる。

そういった子がずっと優等生ならいいのですが、どこかで挫折したら大変です。ずっと優等生というのはまず無理です。どこかで挫折がくる。勉強をしなくなって成績が下がってしまう。そんなときどれだけ許容できるか...その辺が難しいところだと思います。

子どもが、どんな人生を歩もうとしているのか、何が好きなんだろうか...を常に考えることは、大変重要なことと考えています。

ですから、入塾の最初は何もしないことが多いです。お互いにどんな人間かわからないところからのスタートですから。漫画からのスタートだったりもします。

そのうちやる事がなくなって話を少ししたり...そんな感じで進めていくことが多いです。

【合格した国公立大学】(五十音順)

- ・ 鹿児島大学 法文学部 経済情報学科
- ・ 佐賀大学 医学部
- ・ 佐賀大学 文化教育学部 学校教育
- ・ 佐賀大学 理工学部 数理学科
- ・ 下関市立大学 経済学部 経済学科
- ・ 筑波大学 理工学群 応用理工学科
- ・ 長崎大学 経済学部 総合経済学科
- ・ 名古屋大学 経済学部 経済学科
- ・ 宮崎大学 教育文化学部 総合経済学科
- ・ 山口大学 工学部 機械工学科

【合格した私立大学】(五十音順)

- ・ 青山学院大学 文学部 史学科
- ・ 神奈川大学 経営学部 国際経営
- ・ 関西学院大学 経済学部
- ・ 九州産業大学 商学部 商学科
- ・ 久留米大学 法学部
- ・ 久留米大学 商学部
- ・ 鈴鹿医療科学大学
保健衛生学部放射線技術科
- ・ 西南学院大学 経済学部 経済学科
- ・ 筑紫女学院大学 文学部 人間福祉学科
- ・ 東海大学 政治経済学部 経済学科
- ・ 東京工科大学 コミュニケーション学部
- ・ 東京工科大学 メディア学部
- ・ 同志社大学 教育学部
- ・ 日本社会事業大学 社会福祉学部
- ・ 福岡大学 商学部 商学科
- ・ 福岡大学 経済学部 経済学科
- ・ 明治大学 文学部
- ・ 立教大学 文学部
- ・ 早稲田大学 文化構想学部
- ・ Massey University (ニュー・ランド)

【各種学校】

「心塾のコンセプトはわかったが、では実際にどこに合格したか知りたい」という意見を頂戴したので、ここにまとめてみました。

これまで、このように7年分を一覧にしたことがありませんでした。、改めてみんな頑張ってきたなあと思います。

ここまで、この冊子を読んでいただいた皆様にはおわかりいただけと思いますが、これはあくまでもこれまで心塾に通ってくれたみんなの「夢を求めた」結果でしかありません。

すべての卒業生の進んだ道が、その時点でのみんな最高の進路だったのではないかと信じています。

ですから、進路に優劣などないのです。

偏差値を上げるテクニックよりも、生きていく気持ちをもみんな学んで欲しいと思っています。

そして、この最終学歴を経て社会人になるOBも出始めています。学校の先生、法科大学院への進学、会社員と続々と社会に巣立ってくれています。

そこでこそ、心塾で学んだことを存分に活かしてくれるのではないかと思います。